
死の境に棲まうモノ

都築景

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

死の境に棲まうモノ

【Nコード】

N7420A

【作者名】

都築景

【あらすじ】

イザ・ナギ・ツク・サノの四人の死神がいつものように仕事をしに出現させら、順調に仕事をしていると最後の一人（飯田暁）で問題が起きてしまい……。日常に生きていた少女と日常を捨てた死神のお話

プロローグ：目覚め

ふ、と意識が現実へと浮かんでいった。未だに慣れない他者による意識の覚醒。

ゆっくりと目を開き、世界を映す。

何度か瞬きしながらも全身の神経及び筋肉に異常が無いか確認する。

「悪趣味」

ここにいない、いやそもそも姿すら知らない誰かに向かって呟く。イザがいるのはどこかの映画館だった。平日の昼だからか、人はあまりいない。

スクリーンには何か恋愛物の映画が流されていたが最初から見ていないのでわからなかった。それ以前に興味もない。

薄暗い中、立ち上がると一応ほかの人間の邪魔にならないようにシアターから出る。

オレンジっぽい蛍光灯に照らされたいくつかのドアが並んだ廊下には人気がなく係員が一人退屈そうに立っていた。

イザが早足でその目の前を通り過ぎると、少し驚いたように彼女を見て首を傾げた。

なにせ、イザの姿は俗に言うゴスロリというやつでかなり目立つのだ。だが、係員が驚いたのはおそらくそんな彼女が入るのを見ていないからだろう。

実際、イザはあの場に出現させられただけでチケットなど持っていないのだから。

面倒なことではできるだけ避けたいので係員を見ることもせずになささと横をすりぬける。

シアターはデパートの最上階にあるものらしく、やはり人のまばらな売場を早足で行き、エスカレーターで下に降りる。

降りてまず向かったのは本屋だった。雑誌等で今が何年のいつ頃

なのか、何が起きているのか確認するのが習慣となっているのだ。ばらばらと雑誌をめくりながらもイザは人の目を引いていた。雑誌を棚に戻し、息をついた。必要な情報は大体手に入った。さて、どうしよう？

とりあえず外に出てここが何処か調べようと考え、本屋から足を外に出したとたん…同胞の呼び声が聞こえた。しかも、かなり近い。肩先までの短い髪を揺らしながらエスカレーターを駆け降りる。彼はすぐに見つかった。

花のような笑みを浮かべ、イザは自動ドアに寄り掛かる少年に近付いた。

「- 久し振りね、サノ」

黒のフェルト帽を被った少年、サノはイザの言葉に黙ったままわずかに顎を引いた。

いつも通りのサノの寡黙さに肩をすくめ、それでもイザは笑っていた。やはり、数少ない同胞の変わらぬ姿を見ると安心してしまっただ。

「ナギとツクは？もう二人とも覚醒してるの？」

「ええ、すでに二人とも合流しています」

「また私がラストかあ。いつも私が最後のよねえ」

腰に手を当てイザは不服そうに呟いた。

サノはくい、と帽子を深く被るとすたすたと歩き出した。相変わらず何も言わないままで。

小さく笑い、イザもその後について外へと出る。まだ夏の名残をわずかに残した風が頬を撫でてすぐに去っていく。

通り過ぎていく風の中に交じる排気ガスの鼻に残る臭いに眉をかめる。もう何度も嗅いだ臭いだが今でも不快で慣れることが出来ない。

「大丈夫ですか？」

サノがイザの顔を覗き込み、抑揚のない声で問いかけてきた。

イザが前にこれにやられて調子を崩したことを彼はまだきちんと

覚えているらしい。あの時は本当に気持ち悪くて死にそうだった。

「大丈夫、ありがとう」

軽く頷いて笑うと安心したらしく、また無言で歩き出した。

「それにしても、人間はよくこんなモノに耐えられるわね」

「イザの鼻がいいだけなのでは？」

「まあ、そうなんだろうけどさ。後はもう慣れだろうね。毎日こんな匂いでたら嫌が応でも慣れそう」

わずかに顎を引いて同意を示し、サノは軽く辺りを見回した。確かに昔と比べて今のこの社会は不快なものが多い。イザほど鼻の良くない彼でも時折この濁った空気に嫌気がさす。

「…どうかした？」

「いえ。早く行きましょう、二人とも待っていらっしやるでしょうから」

わずかに姿勢を低くして顔を覗き込んでくるイザにそう告げて少し歩くスピードを上げた。

どちらにしろ彼女に害であるものがある場所に長居する気はない。その横に並び、イザは空を仰いだ。彼女が知っている物の中で唯一変わっていない物を。サノの横を歩きながらここ最近の出現の多さがつい気になってしまふ。一年に一回、多ければ三回も出現させられている。前と比べると異常なほどに多い。

濁っているのは空気だけでない、ということだろうか。

何にせよ、疲れることには違いない。

イザは小さくため息をついた。

「へえ、今回はマトモじゃない」

目の前のマンションを見上げ、イザは呟いた。

少しぼろくはあるが今までのものに比べれば格段にいい。なにせ、非常にぼろい幽霊ビルっぽい物やら絶対に人が住まない今にも崩れ

そんなアパートやらマトモで無いものばかりだったのだから。「前のような場所も無いわけではないのですが…人目につく場所だったので」

「でも、私としてはやっぱり普通の場所の方がいいけどね。サノもそう思わない？」

「仕事に支障が出ない程度ならどこでも」

ある意味サノらしいと言えばサノらしい言葉に肩を竦め、イザはマンション中に足を踏み入れた。部屋がどこかというのは大体わかる。

エレベーターで最上階まで上り、すぐそばの鉄製のドアをインターホンを押すこともノックすることもせずただ開けて入る。

薄暗い玄関で靴を脱ぐと躊躇うこともなく、リビングに踏み入る。「やつほー、久し振り」

のんびりと寛いでいた二人の青年はいきなりの侵入者に身構えたが、

「お嬢じゃん、久し振りい」

すぐに（約一名のみ）が切り替えて朗らかに笑いかけてきた。

「相変わらずね、二人とも。ツクはウザイくらい無駄に元気でナギはムカつくくらいに無口で」

「アハハ、お嬢も相変わらずさらっと痛いこと言うねえ」

「あら、でも本当のことでしょう？それよりもツク、またその眼帯外してないの？」

呆れたようなイザの言葉に眼帯を付けた青年、ツクは困ったように淡い笑みを浮かべた。

「大事な人から貰った物だからねえ、そう簡単には外せないんだよね。…イザにもそういうもの、あるでしょ？」

「さあ？でも黒の眼帯なんて胡散臭くて女の子にモテないわよ」

悪戯っぽく笑い、イザはリビングの床にぺたんと座り込んだ。つい昔からの癖で床に座ってしまうのだ。軽く首を傾げて見上げるとナギが唇の片端を持ち上げた。彼は口数こそ少ないが表情の起伏

はそう少なくない。まあ、サノに比べれば、の話だが。

今時の染めたのでない白ような銀のような髪をかきあげ、ナギはイザ・サノ・ツクをテーブルのまわりに集めた。その手にはいつの間にか黒いインクが刻まれた紙の束が収められていた。

「今回の仕事だ」

テーブルの上に紙を広げると各々が手近なものを取った。

「秋山正実、38歳広告会社勤務。ふうん、中々のエリートさんね」

「松本優美、27歳フリーター」

「井上薫、31歳自営業に渡辺香織、18歳フリーター。うわ、この年で2児の母だつて」

「昔だつたらそんなものだったな。小暮拓哉、20歳専門学生」

取った紙に書かれた文字からそれだけを抜き出して四人が順に声に出した。紙面には他にも住所や一ヶ月先の予定や立ち寄る場所、さらには顔写真までもが写されていた。

「五人、か…。前回よりも少ない」

ナギが腕を組んで呟いた。確かに前回よりは少ないがそれでも一回の仕事で五人は多い。

「…ごめん、訂正。六人みたい」

紙束の下に隠れていた紙を引っ張りだし、イザはひらひらとそれを振った。

紙にはまだ幼さを残す少女の顔写真と『飯田暁16歳高校生』という文字とが無機質に印刷されていた。

「だ、そつだ」

「チエツ、面倒だな。大体、ここ最近仕事が多すぎだろう」

「確かに昔と比べると異常です」

「一ヶ月で六人、そう一人には時間を割いていられないな。忙しいのは好きでないんだがな」

珍しくサノを交えて文句を言い合う三人に見向きもせず、イザはどこか緊張した面持ちの少女の写真を眺めていた。

16歳、あの時のイザと同じ年齢だ。

この年の、今のイザの外見年齢と同じ年の少女を見ると、つい考えてしまう。この少女は幸せに日々を過ごしているのだろうか？ 将来という物のために努力しているのだろうか？

それをもぎ取る資格があるのだろうか？

かつてただ一つの復讐のために自らの将来をもぎ取った者の答えの無い問いだった。

首を振って頭から疑問を追い出し、イザはパンツと手を合わせた。

「さあ、とつとと計画でも立てましょう」

三人に告げ、行動を起こす。

あの時選んでしまった役割を果たす、ために……。

プロローグ：目覚め（後書き）

まだ書き始めたばかりなので自分でも謎な設定がありますが気に入っていただけなら続きもお願いします。かなり時間がかかると思いますが…（^- - ^- ;）

死の境に棲まうモノ

一章：飯田 暁

飯田暁はなにかに呼ばれたように感じ、学校の廊下でふいに足を止めた。だが振り向いてもそれらしい人影は無い。

「暁、どうしたの？」

「いや、なんでもない」

友人の問いに軽く首を振り、再び足を前へと向ける。早くしなければ次の授業に遅れてしまう。

学校に来て友達と馬鹿みたいなことを言い合って…それが飯田暁の日常だった。一度失いかけた、日常。こつ普通に生活しながらもあの時もし…と考えずにいられない。

奇跡、と誰かが言ったが確かにそうだった。あの状況にいたのにこつして日常の中にいられるなんて、奇跡に違いない。

「そうだ、暁。今日一緒に帰れる？」

「ごめん、今日は無理。寄る所があるんだ」

「寄る所って…まさか男じゃないでしょうね？」

どこか探るように友人にまさか、と暁は笑った。

そんな、いつもと同じ変わらない日常。いつ崩れて失われるかわからない、モノ。

友人の話しを聞きながら暁は窓から空を見上げた。いつもと同じようにそれは少しづつ変化しながらもそこに変わらずに存在していた。

死の境に棲まうモノ

飯田暁は二年前に一度死にかけた。

通学中にトラックと乗用車との事故に巻き込まれたのである。

乗用車の運転手は助手席にいた人ともに即死でトラックの運転手もただでは済まなかった。なのに、暁は自転車の下敷きになって打

撲とかすり傷を負ったただけであった。

両親は奇跡だと言って喜び、警察や医者などの関係者も運がよかったと言った。

暁には、暁にだけは日常が戻ってきた。

それから一度死にかけた少女は事あるごとに死について考えるようになった。それがただ一つの変化。

学校近くの駅から2、3駅離れたそこそこ大きな駅のすぐ側にある百貨店の中にある本屋に暁はいた。

無類のというわけでは無いがどちらかといえば好きな部類に入る暁は月に一度はここに来て一時間近く本を見ていく。ここら辺で一番大きいので品揃えがいいのだ。

前から目を付けておいた文庫本数冊とハードカバーの本を一冊買い、店を出る。

全てがいつもと同じだった、ここまでは。

まだ時間があつたので服や雑貨を見て回っていると、まるで生きているかのように鞆が腕から落ちた。

「はい」

暁が拾うより早く伸びてきた腕が鞆を取り、差し出してきた。

「あっ…ありがとうございます」

「いいえ」

そう言う青年を見た瞬間、暁の愛想笑いがわずかに引き攣った。

黒のハーフコートを着た青年は人懐っこく笑っていて美形と言ってもいいが、片目を覆う眼帯がそれをどこか異質な感じにしていた。いや、眼帯など特に珍しいものではないのだが…さすがに黒いのはどうかと思う。

ヤのつく人のような危ないかつ怪しい雰囲気ではないが関わっておきたい感じでも無い。

「…ところでさ、君、今暇？」

明らかにナンパとしか思えない青年の言葉に暁の思考がフリーズした。

中の中もしくは中の上と言われる暁の顔は平均的でそう言う風に声をかけられたのは今回が初めてであった。しかもその相手が眼帯の怪しい人物とは…。

「もしよかったらお茶でも一緒にどう？」

にっこりと笑みを浮かべる青年に頭の混乱がさらに加速した。

初めてのナンパだからか、非常に怪しい青年に声をかけられたからか、あるいはその両方だからか

「えっと、あの…っ。ま、間に合ってるんでっ」

気がつくのと、暁はそう口にしていた。軽く頭を下げた後、駆け足でその場を去る。

あんな断り方自分でもどうかと思うが頭が回らなかったのだ。緊張、張、していたと言ってもいいのかもしれない。

近くのトイレに駆け込み、暁はハアと息を深く吐いた。緊張と恥ずかしさで心臓がドキドキしていた。顔にもわずかに朱が上っている。

「あー、もう…」

小さくつぶやき、暁は額に手を当てた。自分でももう何をしたいんだかさっぱりわからなかった。

朝見たテレビ番組の占いコーナーでは今日の運勢は最高だったのに、と少しズレたことが頭に浮かんだ。再び溜息をつき、暁は一応水を流してからトイレを出た。手を洗って気を取り直してからデパートの中をふらふらとする。

すると、

「…」

いつの間にか少年が暁の目の前に立っていた。

少年は線が細く、服からのぞく肌も白い年上の女性に好かれそうな感じだった。深く被ったフェルト帽がそれを削いでいるが。

「…」

少年は何を言うでもなくただ暁を見ていた。

「えっと、何か用ですか…？」

沈黙が気まぎれなくなつて暁がそう問い掛けると少年は小さく口を開いたが結局何も言わずに閉じてしまった。少年は困つたようにわずかに横を見ると首を傾げた。だがすぐに暁に向き直るとじつと見下ろした揚句、無言のままその場からすたすたと立ち去ってしまった。

「…一体なんだつたのよ」

少年を見送りつてからつぶやき、暁は出口へと足を進めた。

本当に何が何だかわからなかった。あからさまに怪しい眼帯青年にナンパされて、見知らぬ少年にじつと見つめられて…本当に疲れた。

とりあえずもう二度とあの占いだけ信じない、と深く心に決め、肩を落として暁は歩いた。

日常へと、同じいつもへと戻るために。

そうすればこのいつもと違うのも過去となり、すぐに忘れてしまつたろう。今までと同じように。

実際、人々の中を縫うように進んで電車に乗ったときにはもう先程のことなどすっかり忘れていた。買ったばかりの本の内容だけが暁の頭の中にあった。そうしていつもが終わるのだった。

明日には今日あったことなど日常に埋もれるだろう。

だが、その先にどうなるかなど誰にもわからない。こうして飯田暁の愛すべき日常は本人の知らないうちに終わりを告げられていたのである…

一章：飯田 暁（後書き）

二話目です。暁は特に設定を決めてませんが極極普通の人間を指したつもりです。私が普通でないのかも知れないので少し不安ですが。次回は今回全く出番のなかった主人公・イザもちゃんと出てくるので。一応暁は主人公ではありません

死の境に棲まうモノ

二章・日常の終わり

「それで、サノに手伝わってもらったというのに失敗した、と？」
マンシヨンの一室、床に正座するツクとサノを見下ろし、イザは一言一言わざわざ区切ってそう口にした。

湯飲みを持って緑茶を飲むその姿は優雅ですらあったが…怒っているのが嫌というほど感じとれる。顔だけは笑っているので余計に恐ろしい。

「すみませんでした」

声を揃えて謝罪する二人に深くため息をつき、イザは額に手を当てた。

イザとて過ぎたことをいつまでも言うつもりは無い。だが二人が失敗したということはつまりイザがその分働かなければならないということなのだ。

仕事において一番最初に行くことは獲物と接しておくことなのだ。それも出来るだけ印象よく。ある程度心を開かせた方が仕事もスムーズに進む。

「まったく、情けないわねえ。…まあ、私がやればいいだけのことなんだからいいんだけどね。とりあえず貸し一つってことで」

どこか企んでいるかのような笑みを浮かべ、イザは湯呑みを置いた。

イザに貸しを作ってロクでもない目にあつたことのある二人だがこの状況で文句など言えるはずがなかった。

「……イザ、一つ報告したいことが」

ふいにサノがそう口に出した。彼が誰かに振られてでなく自ら口を開くのは珍しく、それ故に三人の気を引いた。

「どうかしたの？」

「彼女の近くにいたときにわずかにテキソコナイの気配が…」

「……そう、厄介ね」

サノの言葉に一瞬言葉を失ったイザはだがしかしすぐにいつものようにつぶやいた。

「ナギ、それにサノも一緒に来てもらってもいいかしら…?」

「ああ」

軽く顎を引く二人に満足げに頷き、イザはそれでも不安を感じずにはいられなかった。彼女の實力は仕事をする分には申し分無いが純粋な戦力としてはやはり三人に劣るのだ。

ナギとサノについて来てもらっても確実に守ってもらえるわけでは無いし、仕事を放棄するのも絶対に不可能だ。やるしかないのだが…恐怖は拭えない。

「明日には動くから二人とも準備しといて」

ため息交じりにそう言い、共同の寝室へと入って慣れた手つきで布団を敷いた。まだ昼前だがもう寝るらしい。

布団に横たわるがやはりすぐには眠れなかった。目を閉じて何度も寝返りを打つ。

やっと眠りに落ちる直前、イザは自分を呪う声を夢つつに聞いた…。

どうしてこんなことになったのだろう、目の前の様子を見ながら暁はそう思った。

多くの人々が常に行き交う大通りの一角で暁を含む数人と同じ年頃の青年達とが睨み合っていた。正確には友人の一人が四人の男と言い合っている。

久しぶりにみんなで遊びに来たのだが友人の一人が青年達の一人とぶつかって因縁をつけられるというベタな状況に陥ったのだ。まあ、謝って済ませばいいだけなのだが…その当たった子が気の強い子で…今に至る。

「由紀、もういいじゃん。謝ってさっさと行こう」

友人、由紀の耳にそう囁くものの

「やだ、だって私が悪いわけでもないのに」
「でも…」

きっぱりと言い切る由紀に暁は後ろで困ったようにしているほかの友人を見た。さすがに不安になってきているらしい。

これがなければいい子なんだけどなあ、と考えながらも由紀を止める方法を探すが見つかるはずがなかった。その間にも睨み合いはエスカレートしていく。

もういつそのこと由紀だけ置いてみんなで遊びに行ってしまうおうか、とまで考えてしまう。

通り過ぎていく人々の好奇に満ちた視線も暁を苛つかせた。中にはあからさまに見学していく者もいる。背後から蹴って無理やり頭を下げさせてやるうか、と限界がきたところで

「…邪魔よ」

ふいに少女の凜とした声がそこにいる者の鼓膜へと入ってきた。と同時に蹴りを喰らった男が一人よろめいた。

ゴスロリで腰に手を当てる偉そうに立つ少女に全員が言葉を失ってポカンとしていた。

「日本語が理解できないの？そんなところにいられると邪魔だからさっさと失せろって言ってるの」

舌打ち交じりにまくし立てる少女に青年の一人が手をのばしてその肩をつかんだ。

「いきなり現れて何様だ、お前」

「はっ、ワタクシサマに決まってるでしょう？」

少女はそう言うと言青年の腕を掴み…気がつくとは彼は道路に背中から叩きつけられていた。

「もう二三発殴らないと失せる気分にならないのかしら？」

呆然とする青年達にそう告げ、少女はどこか曇惑的に笑った。わざとらしく腰を落として構える。

さすがにそこまで言われて残るだけの強さがあるはずもなく、青年達は情けなくその場から逃げていった。

パン、と手を叩くと少女は由紀の前へと移動した。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

戸惑いながらも礼を言う由紀ににっこりと微笑みかけ、少女はその頬に張り手を食らわした。先程と同じようにそこには容赦のかけらもなく、パシンと小気味よい音がした。

「な…っ」

いきなりの少女の張り手に由紀が言葉を失った。音通りかなり強かったらしく、片頬が明らかに赤くなっている。

少女は笑みを崩さない。

「…いきなり何するのよっ」

「私からすれば邪魔なのは彼らも貴女も同じなの。なら片方だけやってもう片方をやらないのは不公平でしょう?」

睨みつけてくる由紀に少女はきっぱりと答えた。無茶苦茶と言えばそうだが筋は通っている。

「由紀。…えっと、ありがとうございました」

今度は少女に食ってかかろうとする由紀を押し止め、暁は少女に向かつて軽く頭を下げた。

少女は暁をまるで値踏みするかのように見ると興味深そうに目を細めた。わずかに交ざっているのは今すぐにでも刃を向けてきそうな嫌な気配、とでもいうようなものだ。

「どういたしました、…私の名はイザ。貴女は?」

「えっ…、飯田暁です」

何の前振りもなく名乗る少女に気圧されるように暁は名乗った。そもそも由紀ならともかく何故暁なのか。いや、それよりもこの少女の名前は変ではないか。混乱してしまった暁だがたった一つだけ断言出来ることがある。こういう変な輩は関わってはいけない。「変な奴には関わらない方がいい」

不意に少女がそう口にした。まるで暁の心を見透かしたかのよう

に。「とか思ったでしょう?」

「えっ……あ、そんなこと……」

思っていない、と続く言葉はじつと見つめてくる少女の視線に喉から出てこなかった。

「嘘があんまりうまくないのね。その方が私好みだけど」

ふふ、と笑って呟くと少女は身を翻しかけた。そうかけたのだ。

ぴたりと動きを止めて驚いたかのように目を見開いて空を仰いでいた。朱いルーージュを引いた唇が声を出さずに動く。

暁も少女の豹変ぶりが気になり、同じように空を仰ぐが……何もない。

やっぱりただのイカレタ人だろうかと思ったとたんに

「-イザっ」

誰かのどこか切羽詰まったような声が出た。

少女の体がビクン、と痙攣したかと思うと……暁は誰かに後ろへと引っ張られた。バランスを崩し、石畳に尻餅をつく。

「ちよっ……」

暁が文句を言おうと口を開いたとたん、直ぐ目の前を何か黒いものが通り過ぎていった。すごい勢いなのでぶつかっていたら……考えたくも無い事態になっていたかもしれない。

「何、アレ……?」

呆然とした由紀の呟きに暁がその何かの方を見たとたん、息を飲んだ。

驚きのあまり後ずさった人々に囲まれていた何かは人、だった。

と言っても黒い靄を纏ったそれが人に見えるのは辛うじて、であるが。

背後で舌を打つのが聞こえて振り返るとあの少女がいた。どうやら暁を助けてくれたのは彼女らしい。

「……あっ」

ぐん、と少女が暁を勢いよく立ち上がらせた。細い腕からは考えられないほどの力で。

「ナギ、サノ、引くわよっ」

少女は鋭く叫ぶと身を翻して走り出した。暁の手を持ったまま。

「えっ、ちよっ」とっ」

「舌を嚙んで死にたくないなら黙ってなさいっ」

驚きの声を上げる暁を焦った声で制し、少女は人とは思えない速さで人々の間を駆けていった。

その日、飯田暁は失踪した…

二章・日常の終わり（後書き）

何とかここまで来ました。イザが暁を誘拐してます。ていうか強いな、イザは。どうでもいい事ですが、途中で出てきた青年達。彼らは昔読んだ少女漫画に出てきたナサケナーズという奴らです。と、いうかあんなことする奴らは今時いないでしょう。次はもう少しうまく書けるといいなあ…

三章：死神は語る

冷蔵庫から水のペットボトルを取り出し、イザは１リットルはあるだろうそれを一気に呷った。

暁という名の少女の手を引いて10キロほど全力疾走して来たからか非常に疲れていた。

涼しい顔で横に立つナギを恨めしげに睨み、リビングの椅子に座る呆然としたようすの少女を見る。

「貴女も何か飲む？」

水とお茶しか無いけど、と出来るだけ愛想よく付けたすが暁は何の反応も示さなかった。ただ目を丸くして部屋とイザとナギとを見ている。

ペットボトルをごみ箱にほうり込み、イザは暁の正面に座った。

「…説明は必要かしら？」

ため息交じりに問い掛けると、暁がゆっくりと頷いた。

背後に立つナギと目を合わせ、テーブルの上に肘を乗せる。毎度

の事ながら説明をすることに気を滅入らせながら。

「さてと…、あまりに突飛で信じられないかもしれないけど…私達、俗に言う死神ってやつなの」

「…はい…？」

イザの言葉に暁はたっぷり間を空けてから間抜けな声を出した。

「死神って…あの魂を取ったりする小説に出てくるあの死神…？」

慌ててそう口にする暁に苦笑い、イザはゆっくりと頷いた。困ったように髪をかきあげ、

「正確にはちよつと違うんだけど、一応分類上はそうなるわ」
付け足す。

暁は驚きで見開かれた目でイザとナギを見た。

いきなり会ったばかりの者に死神ですと名乗られて信じるはずがない、そんなこと位イザもナギもわかっている。だが、ソレ以外に

言いようが無いのだ。ほかに適切な表現が無い。

「えっと…百歩譲ってあなたたちが死神であるとして…私は死ぬの？」

「死ぬ、一応そうなるかしらね。ただ、正しく言っていると貴女はもう死んでなければなの」

「死んでなければ…？」

イザの言葉を反芻して問い掛ける暁に面倒そうに頭を掻き、口の中で悪態をつく。

「ああ、もう面倒臭い。一から説明するからよく聞いて」

先ほどより砕けた口調で言うとイザは暁の顔を覗き込んだ。

「まず、世界には一人一人の違う運命を刻んだ本のようなモノがあるの。その中には貴方達が考えるようなたった一つだけの運命があるんじゃないかって、ある岐点毎に幾つもの選択肢があって選ぶものによつて未来が変わる。ここまでは分かる？」

こくん、と頷く暁に満足げに唇を緩め、イザは腕を組み直した。

「ただ一つ問題があるの。その本の持ち主、『書き手』って言うんだけどそれが一人しかない。その上最初の時と比べて人が多くなりすぎてしまった。一人の神と数千万もの人、どっちが強いと思う？」

「…わかりません」

「それが正解、かしらねえ？…人の正の念と神だったら神が勝つわけれど、人の負の念と神だったら勝つのは人よ。人って不思議でね、喜びや幸せの正の感情より怒りや憎しみといった負の感情の方が何倍も強い」

ゆっくりと諭すように言ったイザだが暁はあまり理解しているようには見えなかった。いきなりこんな事を話されても信じるどころか飲み込む事も難しいのだから当然だろうが。

「すみません…理解できません」

本人もはつきりと言い切れるらしい。

「ま、理解しろって言う方が無理だわね…。簡単に言ってしまうば

…人の負の感情が神の力さえ越えて運命にない道を見出させるようになったってこと」

「…そんなのって、アリですか？」

さらつと言うイザに暁は目を丸くした。神の存在を信じているにしろ、いないにしろ、イザの言葉は以外だったに違いない。

「アリ、よ」

艶かしさのちらつく年にそぐあわない笑みを浮かべ、頷く。

同性だというのにわずかに胸が高鳴るほどのモノだが、暁はその中に裏があるような気がした。

クスリ、と笑ったイザの白い指が優雅に暁に向けられる。

「…だって、貴女がそうだもの」

「……ええっ！」

ワンテンポ遅れて反応する暁に死神がゆっくりと頷いた。

「神を越えた感情はそれだけではただの因子に過ぎないの。だから運命を変えるには人の強い願いと結び付かなければならない」

暁に向けられていた指がゆっくりとテーブルの上を滑るように動く。

それを目で追う暁の顔は相変わらず驚いたままで、まだ話の先がよくわからない状態だった。

「…死んでもおかしくないのに奇跡的に助かった、ってことに覚えは無い？」

イザの問いに応えるように暁の頭に浮かんだのは二年前のあの事故だった。確か、医者も彼女と同じような事を口にしていた。

「ある、みたいね」

暁の表情の変化を読み取ったイザが呟く。

「それがどうしたって言うのっ？」

ふいに暁は声を荒げた。

嫌な予感がした、漠然とした予感が。暁本人もよくわからないがこれ以上目の前のソレの声は聞いてはいけない、本能がそう告げていた。

そんな様子の暁にわずかにイザが躊躇うような素振りを見せた。
「どうもしていない。ただ、生きたい、まだ死にたくない、そういう願いは本能に直結しているそれ故にどんな願いよりも強い」
だからだろうか、暁の問いに答えたのはイザではなく、ずっと黙っていたナギだった。

暁は無表情で立つ青年を見上げた。だが、彼は暁もイザも見ずにただ遠くを見ていた。

「ナギの言った通りでね、生きたいという願いは他のものよりも強いから負の感情と結び付きやすく死ぬはずの人を生きさせてしまふの。……貴女みたいに」

静かにゆっくりと紡がれる死神の言葉。

その瞬間、飯田暁の心が音もなく崩れた。まるで砂の城のように脆く……あっさりと。

「……どうしてそんなこと教えたの？知らない方が……」

呟く暁にイザは困ったように首を傾げた。

「ごめんなさい、本当はこんなこと知らせたりしないの。ただ、貴女の場合はもつとややこしい事情があつて……」

軽く頭を下げて謝る死神は本当に申し訳なさそうで暁もそれ以上責める気が起きなかった。

イザはそつと暁の手を取った。温かい人の感触に込み上げたのはある種の懐かしさだった。死人のようにとまでは行かないが、生きている人に比べれば死神の手は格段に冷たい。

「貴女はきつと私たちを恨むでしょうね、けど……死人である貴女が生きているだけで数百人の人の運命が狂ってしまうの。だから……ごめんなさい」

2つの黒瞳に見つめられ、暁はため息をついた。ここまで謝られてまだ文句を言うほど子供では無い。

どうしたって彼らは殺すのだから、と諦めてさえいたのかもしれない。

「そんな謝らなくてもいいよ。で、そのややこしい事情っていうの

も教えてくれるの？」

「ええ、もちろん」

頷いたイザは立ち上がってコップに麦茶を注ぐと暁へと差し出した。

「けど、その前に一息つきましよう。騒々しいのも帰ってくるしイザがそう口にしたとたん、玄関のドアが音を立てて開いた。と同時に」

「ただいま」

という聞き慣れた声が耳に届く。

ナギが二人に見えないように小さく溜息をついた。余計に話がややこしくならなければといい、と胸中で呟く。

「イザ、御所望の物買ってきたよー」

スーパーのビニール袋片手に入ってきた青年に暁は目を丸くした。「ツク、お帰りなさい」

イザが恐ろしいほどの微笑みで出迎えると、ツクの表情がわずかに引き攣る。パシリに走るまで文句を並べていたイザの豹変ぶりによぎる嫌な予感。

それは振り返った暁を見てさらにひどくなる。

「こないだのナンパ男っ」

暁が責めるかのようにそう言うとツクがナギを睨みつけた。どういう事だ、とその視線が訴えている。

そう睨まれてもとばかりにナギは肩をすくめた。

ちらりと盗み見たイザはニッコリと笑って二人を見ていた。明らかにこの状況を楽しんでいる。

「……イザ」

責めるかのようにナギが呟くと、イザは若干不服そうな顔をしたがそれでも文句を口にはしなかった。

「暁さん、コレは仲間でツクって言うの。ツク、こちらは飯田暁さん」

「いや、言われなくても知ってるから…。それよりも獲物がどうしてここに居るかを教えてくれ」

「サノの予感が当たっていた」

ナギがたった一言で簡潔に問いに答えた。

だがそれだけで十分らしく、すぐにツクの眉がひそめられた。露になっっている瞳が胡乱げに暁を見る。

「何よ…?」

「それで、どうするんだよ?また、構ってやる積もりなのか?」

どこか責めているかのような声音でツクが呟く。

イザはその瞳の奥の温度をわずかに下げ、ツクをいや、その遥か遠くを見ていた。当然でしょ、と唇だけで答える。

「あいつ等は放つといて仕事を優先的にするべきじゃないの?」

「どちらにしろ、何時かはやらないといけないのだから早い方がいいでしょう?」

「違うだろう?ただ自分の過去を精算したいだけなんだろう?」

「ツクッ」

一気にまくし立てるツクを咎めるようにナギが声を上げた。

イザはぎゅっと拳を強く握って俯いていた。ツクを責める言葉も無い。

そして…

「暁さん、ややこしい事情のせいで貴女には少しの間ここに住んでもらわないとな。最低限の衣食住は保証するわ。貴女に生活してもらおう部屋に来てもらってもいいかしら?」

微笑みを浮かべてそう口にした時にはもう暁の手を取っていた。

ナギもツクも見ずに居間を出ていく。まるでそこに何もいないかのように。

暁は半ば強引に引きずられて玄関脇の部屋へと入って行った。

というか、放り込まれた。

「とりあえずここにいて。食事は後で誰かが持ってくるわ」

「えっ、ちよっと…」

「ごめんなさい、ややこしい事情についてはまた今度話すわ」

「いや、そうじゃなくて…大丈夫？」

本当はもっと文句やらを言う所なのだが暁はただ少女を心配していた。

「…ええ、大丈夫よ。ありがとう」

驚いたような呆れているような顔をしてからイザは頷いた。だが、はつきり言っただけ全然大丈夫そうに見えない。

「それじゃ」

と呟いて小走りに部屋を出ていく。暁の更なる追究を逃れるかのよう。

「全然大丈夫じゃないでしょ」

ドアを見つめ、暁は呆れまじりに呟いた。

こうして短期間での人と死神との同居が始まった…

三章・死神は語る（後書き）

随分と間に間が開きました。我ながら情けないうえにそんなに時間をかけたのに出来たのが相変わらず下手です。次こそはもう少しマシに出来るといいなあ

死の境に棲まうモノ

四章：死神のカタチ

ベランダとつながっている窓のカーテンを開くと眩しい光りが部屋に差し込んだ。

「今日もいい天気みたい」

目を細め、イザはテーブルに突っ伏している人影へと笑いかけた。「それはよろしいことで」

昨日も夜中までイザに遊ばれ、寝不足になっている曉が地の底から響くような声で応じる。目元にはしっかりと黒いクマが。

「というか、あんたはなんでそんなに元気なわけ？」

「それはもう、体の作りが違うから」

胸を張って言うイザに気の抜けた返事をし、ため息をつく。

イザを含む死神たちと会ってから五日、曉は何もされる事なく、ただ彼等と生活していた。あのナンパ男も話してみると中々いい奴で、他の三人も裏表がないので下手なクラスメイトよりもマシかもしれない。

「他の三人は？」

「サノ以外は寝てるわ。あの子は今、『デキソコナイ』を探してるの」

「できそこない…？」

「ほら、五日前に貴女が見たあの黒いの。ややこしい話の大元」

「ああ、アレ…。というか、そのややこしい事情は話してくれるの？」

「ああ、すっかり忘れてたわ。ところで紅茶飲む？」

「うん、もらう。じゃなくて、話してくれるの？」

「そのつもりよ。ただ、話すと喉が渴くからね」

コンロにヤカンを乗せ、イザは髪をかき上げた。

機嫌良さそうに紅茶の準備をするイザはそこらにいる少女達とまったく変わらない。

紅茶をいれ、イザは暁の正面に座った。

「それじゃ、始めましようか。まずは…暁さんは死神がどうやって生まれると思う？」

「はあ？………やっぱそういう死神の組織があつてそこで普通に…」
「それはそれで良いかもね、けど違うわ。私たちは…昔は貴方達と同じ人だったの。貴女達の教科書に載る程の時代だけだね」

「元は人間…？」

「そう、人間だった。死神の条件を満たしていて、今に至るといふ訳」

「人間が死神になる、まあ納得はできるけど…。それよりも、条件つて何？」

イザは紅茶で喉を潤すと自嘲するかのように唇を歪ませた。

「愛する人を失い、自らも死にかけているのに復讐を望む者、それが死神になるための資格。その上で覚悟があるのなら契約し、きっかり一年の間に千人殺せば晴れて死神になれるわ」

「千人…。あんたもそんなに殺したの？」

「ええ、そうよ。正直死神になんかなりたくは無かったけどね。皆もそうよ」

「じゃあ、どうして？」

「…メリットがあるから。もしね、千人殺せたら愛しい人を殺した者を自分の手で殺させてくれるのよ」

「たった…それだけの為に？」

「貴方達には解らないかもしれないけど…私達は選んでしまったの。人である事を捨てても…あの人の仇を討ちたかったから」

ゆっくりと言い聞かせるように語るイザの表情は何も映しておらず、暁は言い様の無い何かを感じた。

「…」

「ま、そんな訳で私達は貴女の前にいるの」

さらっとイザは言っているがどこか無理しているように見えた。あくまでも暁の感じたものだが。

正直に言っただけの話聞いて彼女に恐怖を覚えたが、けれど……
だけでもイザという少女に対しての好意が崩れる事は不思議と無
かった。

「…死神ってのは他にもいるの？」

「気を取り直して暁がそう問い掛けると、

「他の国には居るかもしれないけど少なくともこの国では私達四人
だけよ」

「四人だけで…？」

「そ、一年で千人ってのは案外難しいのよ。それこそ戦でもない限
り」

「教科書に載ってるって言ったけど、イザって何時の時代の人なの
？」

「ん？…私はね、平安から鎌倉位までの人。因みにナギとツクがが
戦国でサノが幕末辺りよ」

まるで自分の名前を言うかのようにさらりと答えるイザに暁は目
を丸くした。せいぜい百年程だと思っていたのだ、平安といえそ
の10倍。

呆然と見る彼女はどう見ても普通の何処にでもいる少女。町です
れ違っても死神だとは夢にも思わないだろう。

「そんな風に見て、どうしたの？」

「いや、実はコレ新手のドッキリだったりして、と思って」

「ふふ、確かにそうだったら私達ももつと気楽なのにね」

しみじみと呟くその姿は何とも言えない哀愁を含んでいて…暁は
何も言えなかった。

いや、言ったところでどうしようもないのだ。彼女と暁は決して
同じ立場ではないのだから。どんな言葉も本心までは届かない。

「話を戻しましょうか。…もちろん、失敗する人もいてね、それが
『デキソコナイ』なの。たぶん、そっちの方が私達より多いでしょ
うね」

イザはすっかり温くなった紅茶を流し込み、手を組み直す。

「彼らの、『デキソコナイ』の目的は死神の標的を彼らの手で殺すこと。つまりは死神の邪魔をするって事ね」

「って事はアレは私を狙ってたわけ？」

「ま、そういう事。因みに私達はアイツらに標的をやられたらペナルティが課せられるの。だから、私達も必死で動かなきゃなのよね」

「でも、どつちにしろ私は殺されるんでしょ？」

「まあね、でもアイツらよりかは苦しませずにやれるわよ。『デキソコナイ』と私達じゃあ差が有り過ぎるのよ」

「いや、そんなこと言われてもわかんないし。…そもそも『アレ』って一体何なの？」

「呼び名の通りよ。契約したのに一年で千人殺せなかったモノ。殺した人間が多いほど人の形に近いわ。それに…彼等は私達の標的を殺せたら褒美が与えられるの。コレは…」

一旦言葉をきり、イザは不快そうに眉をひそめて息を吐く。

「つまり、ゲームなの。貴女達を配当金にした最低の、ね」

「なに、それ…」

「不快なのは私達も一緒よ。それでも選んだ以上やり切るしか無いわ、たとえどれほどの苦痛が待ってようと」

眉をしかめたままイザは答えた。暁の方を見ている彼女の視線はしかし、遙か遠くを見つめていた。

「この体はね、特別な。この千年間私は年をとらずに不老で居たし、どんな大きな怪我をしてもすぐに直るのよ」

自嘲の笑みを浮かべ、イザは腕を組み直した。

どこか声をかけ難い彼女の雰囲気には暁はすっかり冷めてしまったカップを両手で包んだ。

「便利な体よ、けど治るときの痛みはその怪我の約二倍になるのよ」

「うわ、痛そう」

「契約したからとはいえ、人殺しをしてる事にかわりはないって、

死んでからも楽に転生させてくれないしねえ」

眉をしかめたまま、イザが愚痴る。

「死神でも死ぬの？」

「当たり前よ、死神とはいえ体の構造は人と変わらないんだから。頭をやられたり心臓を傷つけられれば死ぬわ」

「転生つて…？」

恐る恐るといった感じで暁は問いかけた。所在無さげに目を徨わせる。

「もちろん、貴女が知ってるあの輪廻転生よ」

「そう、何だ…」

「本当にある事なのよ。…私達の場合は、極悪人と見なされて…千回様々な方法で死を受け入れ、黄泉の業火で千年間焼かれ続けて…やっとなれるの」

「…」

自嘲の笑みを浮かべてさらりと告げるイザに暁はただ引き攣った笑みを浮かべるしかなかった。

「まあ、貴女達の場合は罪人じゃないし、すぐに生まれ変わるけどね」

「あ、そうなんだ…」

イザの話にわずかに不安を感じていたがその一言に小さく安堵のため息をついた。

「死神の講座はこれで充分かしら？」

「え…あ、うん」

につこりと微笑んで問いかけてくるイザに気圧されたかのように暁はぎこちなくうなずいた。

優雅に立ち上がり、イザが空になったカップを手にする。

その時、まるで見計らったかのように玄関でドアが開く音がした。

「帰ってきたわね」

すっと目を細め、イザがつぶやいた。

死の境に棲まうモノ

そして、彼女の終わりまでの時は回る。まるで石が坂を転がるように急速に、止まる事なく……

四章：死神のカタチ（後書き）

我ながらややこしい設定です。暁の性格が毎に違うし、そもそも普通の人はあんなあっさりを受け入れないよ…。
次はもうちょっと早く出来るといいなあ

五章：終わりへ一歩

「で、どこにいるかは分かった？」

再び紅茶の入ったカップをテーブルに起き、イザがサノに尋ねた。カップの数は先ほどの2個より多く、5つ。サノと文字通り叩き起こされたナギとツクの分もいれて。

「ええ。彼女の通っていた高校の辺りをうろついています」「こつちには？」

「まだ気付かれてはいません。今回のも夜行型なので今の所は人も気付かれていません」

「そう…、けれど昼に出歩くようになるのも時間の問題よね」

「イザ、どうする？」

イザは深々とため息をついた。手を組み、暁を含めた4人を見る。「やるしかないでしょ。避ける訳にもいかないし」

その一言で全てが決定した。

「了解」

「はいよ」

「しかし、今回はどのようにやる？」

「んー、考えてない。けど、囿は必要よね」

そう言い、イザは暁の方を向いた。次いで他の三人も。

「囿…？」

「あいつらの狙いは飯田暁さんだし、これ以上適した人はいないわね」

「そうだな、悪くない方法だ」

「あとは、仕留める場所だよね。なるべく人目につかない方がいいし」

「サノ、候補地はある？」

「ええ。最善の場所としては」

「ちよっと、待てえ」

サノを遮ってそう言ったのはもちろん、暁である。本当に当然の事ながら。

「どうかした？」

「その困っているのはまさか、私…？」

「それ以外に誰がいるってのよ。ええ、死なないように守りはするから」

「そういう問題じゃないっての。っていうか、どっちにしろ私は死ぬんでしょ？」

「ええ、そうなんだけど。でも、どうせなら痛くない方がいいじゃない」

「その『デキソコナイ』に殺されると、痛い…？」

「詳しくは知らないけど、一度じゃあ死なせてくれないでしょうね。人としてのカタチがちゃんとなっていないからね」

「今すぐここで私を殺すのは？」

首をかわいらしく傾げ、暁が最後の頼みの綱に足をかける。それはもう必死の形相で。

イザはというと、

「…ダメ」

と、無情にももたつた一言でそれを切り捨てた。ものすごく優しく、そんな笑みさえ浮かべて。

「イザ」

「私達がペナルティ課されるからそれはできないの。人生最後の人助けだと思って手を貸して」

情けない声を出す暁にイザは宥めるようにそう言った。しかし、結構自己中心的な言っている。

まあ、そこら辺はいつもの事なので暁以外誰もつつこむなどということはしない。我関せず、でお茶を飲み続けるだけで。

「っつ。わかつたわよ、協力するわよ」

「じゃあ、それを前提に考えましよう。サノ」

「はい。やはり、人目につかない場所となると深夜の学校位しかあ

りません」

イザに促され、サノが淡々と口にする。

「人目につかない所じゃないといけないの？」

「あんなのがいきなり現れたら大騒ぎになるでしょうが。だから、やるなら見られないようにしないと」

「普通に人通りのない路地とかは？」

腕を組み、暁が頭を捻りつつ質問していく。

「暗いから却下。アイツら黒いから見えにくいだよ。だから、明るくできてかつ広い場所が理想的ね」

「なるほど。そうなると学校とか図書館なんかがいい訳だ」

軽く納得したように頷いて暁はそう口にした。

イザも

「そういうこと」

と同意してからすつかり温くなった紅茶を喉へと流した。

「壊した物は朝までには元に戻るんだけど、人の記憶はそうはいかないでしょ。だから、公共の施設より学校の方が人が少ないしねえ

…」

「それはまあ…」

「最悪、姿見られても音聞かれても怪談で済ませられるし」
にっこりと笑ってイザがそう付け足す。

そんな風に自信満々に言われるとさすがの暁も突っ込めない。そんな適当でいいのか、と口に出さずにいるだけで。

「ま、適当っぽいけど今までこれで成功しているからさ、大丈夫。

… たぶん」

そんな暁の考えを見透かしたかのようにツクがフォローする。本当に効果があるかはともかく。

「たぶん、とは何よ。失礼だわ」

「だが、一度それが成功せずに警察を呼ばれたこともある。あれは苦勞した」

「…確かに完全に効くとは限らないかと私も思いますが」

「ナギにサノまでそんなことを言うのっ？ だったら少しは自分達で考えてもらいなさいよ」

「考えつかないからイザの案を受け入れているの」

「今のところ最善の案ではあるからな」

「私はイザがそれでいいのなら構いません」

ツク、ナギ、サノの順にそれぞれが思うところを口にした。少し、イザが眉をひそめたがスルーされてしまう。

「で、どこでやることにするの？」

「ん？ 貴女の通っている学校」

「え、マジで？」

「マジ、で」

まあ、そこら辺はいつもの事なので暁以外誰もつつこむなどということはしない。我関せず、でお茶を飲み続けるだけで。

「っつ。わかつたわよ、協力するわよ」

「じゃあ、それを前提に考えましょう。サノ」

「はい。やはり、人目につかない場所となると深夜の学校位しかありません」

イザに促され、サノが淡々と口にする。

「人目につかない所じゃないといけないの？」

「あんなのがいきなり現れたら大騒ぎになるでしょうが。だから、やるなら見られないようにしないと」

「普通に人通りのない路地とかは？」

腕を組み、暁が頭を捻りつつ質問していく。

「暗いから却下。アイツら黒いから見えにくいだよ。だから、明るくできてかつ広い場所が理想的ね」

「なるほど。そうなると学校とか図書館なんかがいい訳だ」

軽く納得したように頷いて暁はそう口にした。

イザも

「そういうこと」

と同意してからすっかり温くなった紅茶を喉へと流した。

「壊した物は朝までには元に戻るんだけど、人の記憶はそうはいかないでしょ。だから、公共の施設より学校の方が人が少ないしねえ……」

「それはまあ……」

「最悪、姿見られても音聞かれても怪談で済ませられるし」
につこりと笑ってイザがそう付け足す。

そんな風に自信満々に言われるとさすがの暁も突っ込めない。そんな適当でいいのか、と口に出さずにいるだけで。

「ま、適当っぽいけど今までこれで成功しているからさ、大丈夫。

…… たぶん」

そんな暁の考えを見透かしたかのようにツクがフォローする。本当に効果があるかはともかく。

「たぶん、とは何よ。失礼だわ」

「だが、一度それが成功せずに警察を呼ばれたこともある。あれは苦労した」

「……確かに完全に効くとは限らないかと私も思いますが」

「ナギにサノまでそんなことを言うのっ？ だったら少しは自分達で考えてごらんなさいよ」

「考えつかないからイザの案を受け入れているの」

「今のところ最善の案ではあるからな」

「私はイザがそれでいいのならば構いません」

ツク、ナギ、サノの順にそれぞれが思うところを口にした。少し、イザが眉をひそめたがスルーされてしまう。

「で、どこでやることにするの？」

「ん？ 貴女の通っている学校」

「え、マジで？」

「マジ、で」

予想外の事に驚く暁にイザは思わず見とれてしまうようなが極上の笑みを浮かべた。明らかに楽しんでいるように見えるのは暁の気のせいではないだろう。

「いつ、実行いたしますか？」

「そうねえ、今週の日曜が満月だからその日にしましょうか？」

「それでいいと思うよ。ナギとサノも賛成だろ？」

「ああ」

「構いません」

二人がほぼ同時に首肯する。

イザは満足そうに頷いて近くにいたサノに何かを囁く。彼はそれに頷くと帽子を深く被り直してから音もなく部屋から立ち去って行った。

「さてと、それじゃあ暁さん、学校の大体の間取りを教えてください」

「あ、うん。でも、彼…サノさんは？」

玄関のほうを見て暁が不思議そうに尋ねた。トイレに行ったようにも寝室に行ったようにもみえない。

「ん？ああ、サノは感知能力が高いからアレの監視に行ってもらうの。だから、私達とは別行動なの。ほら書いて」

イザからペンと紙を渡され…もとい、押し付けられ、暁は高校の全貌をまず書いた。次いで教室などの細かい部分を。

「はい」

「ありがとう。ふうん……それじゃあ、ツクは暁さんと一緒に校門の前にいて。ナギはここに、で私はここで待機。わかった？」

紙の上で指を滑らせ、イザが指示を出した。

「了解」

「オッケー」

二人が頷く。

イザは四人の名前を書き足して、紙を折り畳むと

「ナギはこれをサノに渡してきて。ツクと私と暁さんは後は自由行動。以上」

ナギに紙を押し付けた。

ナギはそのままできていき、ツクも何処かへと出掛けてしまう。

暁は外へと出れないし、やることもないので結局リビングに残っ

てばーっとするしかない。ついでにイザとしゃべったりもして。

金曜日まで、は。

彼女は、わかっているだろうか。彼らとの奇妙だけれども心地よくさえある、日々がもう、終わると。けれど、知っていようと知らなかりうと時は、留まらない……

六章：狩り前

深夜、車どころか野良犬一匹見当たらない通りに暁とツクはいた。他の三人の姿は見えない。

「…ねえ、本当にこうして突っ立っているだけでいいの?」

暁が隣に立つツクへと何度目かの問いを投げ掛ける。

「そう、いいの。後は、奴が来たら校内をひたすら走ればいいから…アバウトすぎる…」

額に手を当て、暁が呆れまじりにつぶやく。

「ま、そんなもんでしょ。深く考えない方がいいって、ね?」

ツクが右手に持った細長い鞘を器用にくるりと回してにっこり笑った。

「人形に近いほど知能も高くなるからね、それによって対処の仕方も変わってくるんだよ。だから、臨機応変にやるのが一番」

「…」

暁はますます呆れてしまい、深くため息をついた。それ以外にはどうしようもないのだ。

沈黙が降りた。人通りがないせいで余計に冷たく、しん、と感じる。

「ねえ」

「どうかした?」

欠伸を噛み殺してツクが暁を見る。

「一つ聞きたいことがあるの」

「俺で答えられることなら…」

片目を覆う布を大切そうに撫で、ツクは空を仰いだ。その仕草が何となく嫌そうに見える。

暁も夜空を見上げた。

金色の光を放つ月が薄い雲を通してぼんやりと見えている。その周りの星々も控え目ながらも輝いている。美しい、けれどもどこ

か現実味の欠けたように見えるのは暁だけなのだろうか。

「…あのさ、イザってどうして

「デキソコナイ」に構うの？ペナルティーって言ってもたいしたことないんでしよう？」

ツクが煩わしそうに前髪をかきあげた。ついでに困っているらしく、視線が泳ぐ。

再び降りた沈黙は当然気まずいもので二人はただ空を仰いだ。

「…イザは、野党供に村を荒らされ、楯にされたあげく…大好きだった人が酷い殺され方をした後になぶり殺されかけたらしい。そいつらを殺す為に契約した」

「…」

「イザは千の人間を殺した、けど…イザに殺されかけた人が同じ道を選んだ」

「うそ…」

口に手を当て、暁が信じられないとばかりにつぶやいた。

だが、ツクは静かに首を横に振るだけだった。

「嘘じゃない。それに、彼女は結局死神にはなれずに

「デキソコナイ」になったんだ」

「だから、なの？」

「そう、だな。だからあいつはヤツらを狩ることに積極的なんだ。

その中の彼女を殺すのは自分の役目だ、と」

ツクが何かを堪えるように細く細く息を吐いた。その目が見ているのは、遠い何処か。

「俺達は、何年かに一度仕事でこっちの世界、いや空間と言った方がいいかな…。とにかくこの場所に来るんだ」

「…」

「その目覚めていない間はずっと眠っているんだ、悪夢を見ながら。それも、また代償ってやつなの」

ツクはどこか寂しげに、懐かしげに、躊躇うように笑った。その指が少し迷ってから片目を覆う眼帯を外した。

挟られたような傷痕が露になった。すぐに閉じられた目には…眼球がそっくり無くなっていた。

ツクは眼帯を頭上に翳して笑みを顔から消した。

「これはね、俺の大切な人がくれたもの。他の三人も、それぞれ大切な人の遺品をたった一つだけ持っているんだ。あの時の覚悟を忘れないように、ね」

ため息をつき、眼帯を元の位置に戻す。につこりとどこか作りもののめいた微笑を浮かべた。

「…死神って何なの？」

「さあ…？人によつて答えは違うし。でもあえて言うなら、俺はそうだなあ…死神っていうのは自分の欲の為に人である事を棄てた愚か者、かな」

「……ないの？」

小さな、風にさえ掻き消されそうな本当に小さい声で暁がつぶやいた。

「ん？」

「後悔してないの？」

「…ああ。まあ、それはね…しまくりだけど。でも、選んだのは他でもない自分自身だから逃げるわけには行かないし」

「…」

暁は俯いた。我ながら馬鹿な質問をした、と。

「あの…、」

「ごめん、と言おうとしたところでツクが」

「静かに」とそれを咎めた。

暁は慌てて口を閉じた。その手のものに鈍い彼女でもわかるほどに空気が張り詰めた。

「…サノが近くにいて、と思う。暁さん、合図したら全力で校内に走って行って、楽に死にたいならね」

ツクが声だけは真面目にそつとつぶやいた。が、鞘から得物 刀を抜くその姿はどこか嬉々としている。獲物を狙う肉食獣を連想さ

せる、そんな姿。

暁は何度か深呼吸した。膝が笑っているがツクから見てもはつきりとわかる。現実味が薄いからか、まだパニックしていないのがせめてもの救いだらう。

ツクは神経を研ぎ澄まし、同朋の気配を探した。サノはともかく、同朋の死神や奴らの気配を探るのはかなり難しい、その上サノは今隠密行動中なのでなおのこと。『…ツク』

死神だけの特殊な方法で名を呼ばれ、ツクは僅かに顎を引いた。どこかにいるであろう同朋にわかるように。それと分からぬように構え、目をこらす。

そのまま待つこと数分、ツクはその気配を感じた。闇を見る中でもなお黒く蠢く何か。舌で乾いた唇を濡らし、腰を落とす。

一步、また一步、それがゆっくりと近づいてくる。獲物を目指して。

さらに一步それが進む。暁にもはっきりと見えるところまで。刹那、

『ツク』

「走れっ」

頭に響く声にやや遅れてから声をかける。ついでに腕を延ばして暁の背を押す。

牽制するように

「デキソコナイ」の目の前に立ち、暁の足音がある程度離れていくのを待つ。そのある程度を彼女が駆け抜けると同時にサノの気配もふ、と掻き消えた。

「さて、と…」

そう口にするとツクは刀を鞘に戻し、

「デキソコナイ」に背を向けて暁やサノと同様に深夜の校舎へと向かっていった。

かくして、獲物を狩るモノと自らの為に狩人から逃げるモノとの

死の境に棲まうモノ

鬼ごっこは当人達のみ知るなか、ひっそりと始まりを告げた。

七章：狩人の夜宴（前）

照明の消えた薄暗い教室にイザはいた。机の上に座り、嗤う。獲物を、

「デキソコナイ」を狩るという事に一種の高揚感が溢れているのだ。それは、黒く醜いものなのだろうが本人でさえ止めることが出来ないものでもある。強いて言うならば、狂気に近い。

これが自分の元々の形なのだとわかっている。いつもはそうではないように振る舞ってはいるが。そして、ここまで

「デキソコナイ」だけに反応するのは『彼』がそう植え付けたからだとも。

びくり、と指先が痙攣するように震えた。

キタ：

イザであつてそうでない誰かがつぶやいた。乾いた唇を舌でなめ、音を立てずに机からおりる。

狩人が薄闇の中一人、動き出した。

荒い息が口から漏れた。

膝に手をついて前屈みの姿勢で二階の廊下を見回した。

ツクに背を押されて暁は校舎へと入つてすぐそばの階段を昇つて来たものの、これからどうすればいいかわからない。

息を整えて背後を恐る恐る見たが、誰もいない。

「デキソコナイ」がない事にほっとする反面、死神達と一緒にいない事に不安を覚える。

暁は階段と隣の校舎との渡り廊下を交互に見た。廊下は二方向に伸びているが左には職員室等があるので候補から外す。

迷ったすえ、右の渡り廊下を選んだ。自分が獲物であるという認識に無意識の内に息を出来る限り殺し、廊下を歩く足が早歩きから

駆け足へと変わっていく。なのに：沸き上がる焦りからか、進んでも進んでも全く距離が縮まった気がしなかった。

心が一気に恐怖で塗り潰された。思考はただ逃げることです。手に一杯なのに、ふとある一つの言葉が入り込んできた。

何故、自分ガコンナ目ニ合ツテイルノダ？

答えは簡単に出た。そう、死神と名乗るモノ達がそうやってきたから。

だが、暁の中はそれで落ち着くはずがない。こんな時でさえ、いやこんな時だからこそ冷静な部分が語りかけるように考える。

彼等は味方なのか、と。今まで無条件に納得していたが死神だなんて、おかしい。彼等はそう悪人という訳でもないし、むしろ話しやすい所謂いい人だ。暁が知っている限りは、であるけれど。

すっかり忘れていたが、暁と彼等は所詮は出会って一月にも満たない関係なのである。彼等の本心がどうであるかなど、分かるはずがない。

そう、彼等を本当に信用していいのか、さえ分からない。

「あ…」

小さくつぶやき、暁は足を止めた。

今更ながらに思い当たったのだ、彼等が敵で無いという事が有り得ないこと、に。彼等こそ自分にとっての狩人なのかもしれないだ、と。

自分が今現在追われる身であることも忘れ、呆然と立ち尽くす。

どうしよう、と口だけでつぶやく。その言葉通り、暁はどうしたらいいのか何も浮かばにず混乱を極めていた。窓の外を見て

「あー、月が綺麗だなあ…」と軽く現実逃避すらしてしまう。が、それも長くは続かなかつた。

ひや、と背筋が凍るような冷気が暁を襲い、

「ヤツ」が気配を隠すこともなく現れたからだ。

それが暁に自身が獲物であり、追われている事を思い出させた。

薄暗い中で闇よりもなお玄い何かは暁がつい先ほどやってきた方

から近づいてきた。その中にあるであろう見えない目がひた、と暁を見据える。

「っ」

ソレから目を反らせぬまま後退り、暁は声にならない悲鳴を上げた。

『イザ』

『サノ？いきなりどうしたの？』

同胞からのいきなりの呼び掛けにイザは足を止めて会話に応じる。

『少々マズイ事に…』

死神になった際に感情を失った彼の珍しく焦った声にイザは眉をしかめる。

『まさか…やられたの』

嫌な予感に先ほどより早い足取りで廊下を再び進みながら最悪の結果を口にする。と、

『いえ』

即座に否定された。

ホッと安堵の息をつく。けれど、足は緩めない。

『ですが、それが起こってもおかしく無い状況です。…飯田暁とヤツが接触してしました』

イザは舌を打った。最悪の一步手前の状況に眉間の皺を深くする。足を駆け足へと変え、

『場所？』

問い掛ける。

『…左端の校舎二階の東側です。ナギもそちらに』

『わかったわ、すぐに行く』

不機嫌かつ苛立った声でそう返し、手近な窓を開けてイザは躊躇いなく三階から飛び降りた。ゴスロリを纏った体がバサバサと派手な音を立てて落ち 途中でがくんとまった。

右手にはめた手袋から細い鋼線が伸びて雨樋に絡まり、イザを空に留めたのだ。

細い体が振り子のように大きく揺れ、コンクリートの壁に勢いよく突っ込んでいく。その寸前で器用に体を反転させ、壁を力の限りに蹴った。

死神の身体能力は使い時によっても違うが人は当然の事ながら獣よりも遥かに高い。その上、イザの脚力は仲間の中でも郡を抜いている。その脚力を思いっきり使った跳躍は勢いと混ざってぎりぎりではあるものの少女を12、3メートルはあるであろう校舎の間を越えさせた。

ガシャン、と体でガラス窓を割って教室に飛び込む。

膝を曲げて着地の衝撃を緩和させるとすぐに立ち上がり、髪や服についた破片を手早く払った。

糸がきちんと戻っているかを確認し、イザは廊下に走り出た。

「きやあああつ」

直ぐ近くから暁であろう絶叫が鼓膜に突き刺さった。

イザは考えるよりも早く声のした方へと全力で走り出した。走りながらもすぐにも攻撃できるように独特の形で構える。

薄闇に慣れた目が二つの影を捕らえた。

「きやあああつ」

暁はそう声の限りに叫んだ。

暁の目の前には今

「デキソコナイ」がいる。薄闇の中さらに闇が凝り固まったようなそれは一応人の姿をしており、顔らしいところの獣じみた一對の金色が獲物を狙う目で暁を見下ろしている。

本能が

「逃げろ」と叫ぶ。なのに、暁にはどうにも出来なかった。膝が笑って歩くどころか、まともに立っている事すら辛い。それでも必死

に足を踏ん張って漸く一步後ずさった。だが、どうあがいてもそれが精一杯で…。

デキソコナイが一步近寄ってきた。その、おそらく腕であるものが振り上げられ…。

その瞬間、

「伏せてっ」

少女の緊迫した声が暁の耳を打った。

言われるままに暁は膝をおって屈み込んだ。もつ足がぎりぎり遅かれ早かれ座り込むことになっていたので偶然とはいえちよつどよかった。

その頭のすぐ上を何か風を切って通り過ぎた。その糸のような何かはまっすぐに、吸い込まれるように

「デキソコナイ」へと向かっていく。

「っ!」

見事に体に突き刺さった糸に

「デキソコナイ」が言葉にならない悲鳴を上げた。

「暁さん、大丈夫?」

「…イザ…」

いつの間にか真後ろに移動していたイザを見上げ、暁は呆然とした声でつぶやいた。

「立てる?」

「…あ、うん。たぶん」

「そう。じゃあ、問題無いわね」

「え…?」

イザの手が暁の片腕を掴んで持ち上げ、無理矢理立ち上がらせる。「逃げるわよ」

深い深い夜の中、人であらざるモノ達の宴は今なお終わる気配を見せず。

死の境に棲まうモノ

八章：狩人の夜宴（後）（前書き）

ずいぶんと久しぶりの投稿です…

八章：狩人の夜宴（後）

暁の片腕を掴んだまま、イザは来た道に戻った。もちろん、全力で。

おそらく今回程度の

「デキソコナイ」ならば、イザ一人でも問題はないだろう。だが、暁がいる。

別に足手まといがいようと勝てない訳では無いのだ。ナギやツクならば迷わずそうするだろう。だが、イザは誰かを守りながらの闘いは得意ではない。

なので、逃げる。

薄暗い廊下を駆けながらもイザは安心していった。あの

「デキソコナイ」は彼女じゃない。

イザにはサノ程の感知能力はないが、彼女を間違えないという絶対の自信はある。あの時の彼女の憎しみに満ちた悲痛な声も顔も、鮮やかにイザの記憶に残っている。

「イザ」

聞き慣れたナギの声にイザははっと我に返った。

入って来た教室を通り越してしまっただらしく、いつの間にか廊下の端まで来ていた。

そして、その壁を背にしてナギが。懐から抜いた愛用の銃の銃口を下に向けて立っている。いつもの白いシャツにスラックス姿の上に黒のロングコートを羽織って。

「ナギ…頼んだわっ」

その姿を認めるや否や、イザは掴んでいた暁の腕を離し、ナギへと押し付けた。

「わっ」

「おい…っ」

ナギがバランスを崩した暁を受け止めた時にはもうイザは踵を返

していた。長い黒髪がそれを追うように翻る。

その姿は段々と小さくなり、闇の中に唐突に消えた。暗い夜を割く光を放つ満月が雲に隠されたのだ。

「何があつたんだ？」

暁を離し、ナギがため息交じりに問い掛けた。

「あ…、えつと…あつちにその、

「デキソコナイ」がいて、イザさんが助けに来てくれてそしたら急に逃げるとか言って走り出して…。あの、聞いてます？」

ただだどしく話していた暁はナギが暁を無視してイザが走っていった方を見ているのに気付き、控え目に問い掛けた。

「ああ、聞いている」

「そ、そうですか…」

突き放すようなナギの言葉になんとかそれだけ返す。初対面の時からあまりいい印象ではないからか、どうもこのナギという青年は苦手だ。

どちらも口を開かないため、何とも言えない重い沈黙が降りる。

「飯田暁」

「は、はいっ」

急に名をフルネームで呼ばれ、暁は驚きで裏返つた声で応える。

「この廊下の先に

「デキソコナイ」がいるのだな。で、イザはそれを殺しにいったと

「はい、たぶんそうだと思います」

「そうか…。全く、イザといいサノといい、どうして何も言わずにいなくなるんだ…っ」

最後の辺りにははつきりとした怒気が込められており、暁は肩をびくりと震わせた。顔は声と違って無表情のままだから余計に怖い。「サノさんが、どうかしたんですか…？」

恐る恐ると暁が問い掛ける。出来ることならばあまりナギと話したくないのだが、このまま黙られたらと考えると前者の方が遙かにマシだった。

「…いないんだ。と、というか何処にいるのかさっぱりわからない」
「はあ…」

「イザはともかく、サノは元々協調性が全くといっていいほどになり。何でだかは知らないがイザに懐いていてな、イザの言う事なら聞くしイザの為なら体をはるんだが…それだけなんだ。俺達の頼みは余程の事がない限り黙殺される」

「…うわー」

ナギの言葉に暁はやっとそれだけを返した。なんとも、まあ極端な態度だ。呆れてものも言えない、とはこういう事か。

ナギは不快そうに眉をしかめたまま、暁を見下ろした。頭一つ分身長に差があるので自然とそうなる。

「…な、なんででしょうか？」

たじろぎながらも暁はそう問い掛ける。はつきり言って怖い。

「行くぞ」

「え…っ。行くって何処にですか？」

「イザのいる所だ」

言い、ナギはすたすたとつい先程イザが去っていった方へ歩き出した。

暁は数秒呆けたものの、慌ててナギの後をついていった。

時は少し遡る

宿直室にいた一人の教師が慌てて懐中電灯を探していた。誰かが入って来たので注意しようとした直後に響いた悲鳴。ただ事ではないと思って駆け付けようとしたのだが、懐中電灯がなかった。

不意に、教師の上に影が覆いかぶさった。

顔をあげると、いつの間に現れたのか少年が一人教師の目の前に立っていた。フェルト帽を深く被っているので顔はよく見えないがおそらくこの生徒ではない少年だ。

「…おい、君。こんな所で何を」

教師が言い切る前に少年がす…と人差し指を突き付けた。
自然と教師の目が指へと移される。

少年が低い、教師にだけ聞こえる声で何か、そう遠い異国の言葉
のような何かをつぶやいた。

途端に、教師の瞳が焦点を失って瞼がゆっくりとおりていく。
ばた…と倒れた教師から聞こえるのは規則正しい寢息。どうやら眠ってしまったらしい、かなり深く。

少年は教師が完全に寝入っているのを確認するとくいつと帽子を
少し上げて隣の棟の方を見、

「…さて、イザの方はどうなってるのでしょうか」
どうでもいい事のようにつぶやいた。

そして何事も無かったかのように姿を消した。

シュ、と利き腕に付けた手袋から得物 鋼線を獲物へと放つ。

糸は

「デキシコナイ」の首らしき部分めがけ空を切るがぎりぎりの所で
避けられた。

「チツ」

イザは舌打ちをすると手を軽く捻って糸を器用に戻した。

図体が大きいので的としてはかなり当てやすいと思っていたが、
存外避けるのだけは早い。お陰で先程から傷一つつけられていない。

そのせいでか、イザの中をらしくない焦躁が焼いていた。

「…あー、もうっ。苛つく奴ね…っ」

苛立たしげに毒づき、利き手を振って本日十数回目に鋼線を

「デキシコナイ」目掛けて放った。

今度は肩の辺りを掠っただけで致命傷どころか斬ってもいない。

「往生際の悪い…っ」

呻くように言い、糸を手元へと戻す。

攻撃して来ないのが幸いと言えば幸いだが、こちらの攻撃も当たらないのだからそうも言えない。

確実なのは近づいて攻撃する事だがはっきり言ってイザの得意とする事ではない。むしろ、苦手だ。

「近距離はツクの専門なのよね…」

眩き、念のため

「デキソコナイ」と間を置く。

せめて注意さえそらせればどうにか出来るが。しかし、その方法の実行法が現時点ではない。

不意に

「デキソコナイ」が動いた。大きく一步踏み込み、腕らしき部位をイザへと突き出す。

「うわ…っ」

それを体を引いてぎりぎりでかわす。

バランスを崩し、倒れそうになるのを足を踏ん張って堪える。が、勢いを上手く逃がせず、よろめく。

「…今まで、出し惜しみしてたってわけ、なのね」

数歩下がって慎重に

「デキソコナイ」から間合いを取り、眩く。先程より声が低くなっているのは気のせいではないだろう。

「ふざけんな…っ」

そう言うや否や、イザは手を降って気迫と共に鋼線を放った。

それは先程と同じように真っ直ぐに

「デキソコナイ」へと向かっていく。

だが、先程と同じように避けられる。

なのに、イザは笑っていた。

一気に距離をつめると、床を蹴って

「デキソコナイ」の顔の辺りに膝を叩き込む。

のけ反る

「デキソコナイ」の目の前に綺麗に着地し、鋼線を放つ。彼女の意

のままに動くそれは真つすぐに

「デキシコナイ」の腕に巻き付き、切り離す。
が、

「デキシコナイ」は傷に構うこともなく…残った腕を振り回した。
イザの予想に反して。

「な…っ」

やばい、と思ったときにはもう腕は目の前で…避けられそうには
なかった。

イザは舌打ちをすると、わずかに腰を落として自分に向かってく
る『デキシコナイ』の腕を見据えた。

「っ」

だが、想像していたような衝撃がイザを襲うことはなかった。
確かに

「デキシコナイ」の腕は繰り出されていたが、その腕は途中から失
くなって…いや、床に落とされている。

「わりいが、こっちは一対一ってわけじゃないんでね。…てなわけ
で覚悟しやがれ」

抜き身の刀を片手にツクが

「デキシコナイ」を挟んだ向かい側にいた。にやり、と笑う。

イザは

「デキシコナイ」の注意がツクに向くや否や後ろに数歩下がって距
離を置いた。

「デキシコナイ」はツクに気を取られていて、イザの方は見向き
もしない。ただ、ツクもそれなりにてこずっているようだ。姿から
して大したことないと思っていたが、案外そうでもないらしい。

イザが己の武器を構えた、その刹那

「が…っ」

ツクの身体が投げ飛ばされた。

どうやら、先ほど彼が切り落とした腕を何とも器用に

「デキシコナイ」は蹴り上げて、ツクに当てたらしい。

「ツク…っ」

イザが声を上げた。

「デキシコナイ」がツクを踏み潰そうと足を上げたのだ。あれを
まともに受けては、いくら死神といえども死んでしまう。

イザはすぐさま鋼線を放ったが、間に合わない。

「……イザ」

静かな、こんな時でさえ平淡な、声音の変わらない声が出た。

振り向くと、サノがすぐ後ろにいた。真っすぐに腕を

「デキシコナイ」に伸ばし、睨みつけるようにソレを見据えている。
そして、フェルト帽の下にある目が冴え冴えとした、見る者さえ
凍らせるような青に変わっている。

サノは他の皆のように武器を使って戦いはしない。彼はまだ人で
あった時から異能の力を持ち、死神となった今でもそれは変わらず、
いやますます強くなっている。そして、それを武器としているのだ。
また、力を使っている際彼の瞳は青くなる。

サノの力によってだろう、

「デキシコナイ」はツクを踏み潰そうと足を持ち上げたまま固まっ
ていた。指の一本さえ、動かせないようだ。

「イザ…っ」

サノに名を呼ばれ、イザは鋼線の中に戻して…両手を前に伸ばし
た。心を細く細く研ぎ澄まして、魂の中のイメージを固定する。

キラリ、と鈍く月光を反射する何かが闇の中から滲みでるが如く、
現れた。

長い長い柄がイザの握った手の中に唐突に形成され、大きく湾曲
した鋭利な刃が光を受けてキラリと獰猛に輝く。

それは鎌だった。よく人が考えるような死神の大鎌。

冴え冴えとした月光を受けて硬質さと、そして獰猛性を秘めた大
鎌に輝きが宿る。自身を強く主張するようにただ、鮮やかに。

イザは息を深く吸うと、その感触を確かめるように強く強く凶器
の柄を握りしめて…静かに構えた。

「ああああああ！」

声を上げ、大鎌を断罪の刃を振るう。

刹那、宵闇の星が一つ…墮ちた。

そして、夜明けはゆっくりと近づいてくる。けれども、確実に

九章：夜と朝の狭間に

ナギを追いかけるように暁は廊下を走っていた。イザに引かれて走った時とは真逆の廊下を。

ナギがもしもの為に、という事で、一回下に降りてから反対側にまわって迂回してきたのである。

前に行く背が不意に止まり、暁もつんのめるようにして足をとめた。ずっと走っていたせいで切れる息を宥めることもなく、彼の視線の先を追う。

暁から見えたのは、床に倒れるツクと何故か動きを止めているあの、気味の悪い

「デキソコナイ」、そして：イザ、だった。

華奢な体と容姿には不釣り合いの大きく湾曲した大鎌を構えている。月光を受けて刃がガラリ、と輝いているように見えた。

「ああああああ！」

イザが叫び、大鎌を力の限りに振るう。

沈む月の最後の一筋の煌めく刃が、身動き一つしない

「デキソコナイ」の体に吸い込まれるように入り、あっという間に両断していく。血にも似た、けれどそれよりも粘着質な黒い何かが大鎌の後を追うように飛び散る。

「っ！！！！」

「デキソコナイ」が言葉にならない叫びを上げ、空気がびりびりと震える。

そして：、その腰の辺りをまっすぐに横に切断された

「デキソコナイ」は、爆ぜた。

いや：正確には、淡い光がその内から爆ぜるように溢れ出たのだ。闇よりもなお暗い表皮を突き破るように光が迸ったのだ。

それらはほんの数秒のことなのに、やや離れている暁の瞳にはまるでスローモーションの映像のように全てがゆっくりと見えた。大鎌の刃に宿る硬質な輝きも、薄れていく闇も、辺りを照らして包み込むような淡い煌めきも、全てがただ鮮やかに。

だから、だろうか。淡い光の中にうつすらと、そうまるで溶けゆく最期の名残のような、ほとんどが透けている影が…見えた。おそらくは人の男性であろう、影は穏やかに笑っていて……すぐに空気の中に溶けていってしまった。

「ああ……」

嘆く声ともため息とも、つく息を暁は吐きだした。

彼は逝ってしまったのだ、となんとなく理解する。彼女もいずれ辿りつく場所に、と。

影が消えてしまうと、それに導かれるように、淡い光も収束していき、最期に瞼の裏にその残滓が遺るだけであった。まるで、幻であったかのように、何もかもが消えた。淡い光はおろか

「デキソコナイ」の姿も、その気配さえも。残ったのはただ一つ、イザの手の中の…大鎌。

非常灯の僅かな光しかない闇に沈んだ校舎に本来あるべき静寂が戻る。

す、と前にいたナギが脇にずれて、立ちすくむ暁をイザの前にさらす。

イザは大鎌を握りしめたまま、暁へとゆっくりと近づいてくる。その瞳にあるのは、悲しげな…けれども全てを諦めて覚悟した、何か。

暁にあと二歩、といったところで死神は…足を止めた。じっと、彼女を見据える。

それは、例えるならば…獲物を狙う獰猛な獣の、目。けれども、獣とは違い…ほんの一欠けらではあるが人らしい感情があった。同情するような、憐れむような、獲物にかけるようではない感情が。

そうして、暁はようやけ思い出した。彼らにとって、

「デキソコナイ」を狩るということは、些細なことで…自分を殺しに来たのだと。

強引に巻き込まれていたというのもあるが…あまりにも、彼らが普通で一緒にいて心地よくて、忘れていた。

膝が笑い、逃げると心の中で警鐘がなった。嫌な汗が背を伝う。

震える足を何とかなだめ、一歩後ろに下がる。が、そこで止まる。暁は自分の体を見下ろした。だが、どんなに動こうとしても…指の一本すら思い通りにはなってくれない。まるで固まったかのように、だ。

視線を上げると…目が、あった。忠実な従者のようにイザの後ろに立つ、サノの空のような蒼い瞳と。

睨みつけるようなその目に、震えが走る。

「サノ」

暁の異様な様子の元に気付いたイザが静かに、たった一言だけそう言った。ひそめられた、けれど強い意思を宿した声音。

サノは何か言いたそうではあったが、イザに睨まれると…渋々とではあるが暁から視線を外した。瞳が空のような蒼からいつもの色に戻される。

その途端、暁の身体からどつと汗がふきだし、膝から力が抜けて冷たい床に座り込んだ。心臓の鼓動がやけに早く、全力疾走した後のように息が乱れている。

イザは暁を、見た。いや、見下ろした。大鎌を持ち直して、屈みこむ。

「ごめんなさいね」

いつも人の目を見て話す彼女らしくなく、やや俯きながら彼女はそれだけ口にした。

暁は…笑った。本来なら、恐怖のあまりパニック状態になるか、震え怯えるかするだろうに…、暁は何故か、ただ力無く笑うだけであつた。

イザは悔やむように、けれど迷いを振り払うように…歯を食い

しばった。

イザは立ち上がると、大鎌を構えた。息を深く、吸う。自分に向かつて振り下ろされる大鎌と頬を撫でる風と音、そしてイザの声にならない叫び…、それが飯田暁が最期に感じたものであった。

そして…その意識は、魂は淡い光の中へと溶けていく。

「もうそろそろ夜明け、だな」

階段の半ば辺りの段に腰掛け、ナギが紫煙をくゆらせながらそう口にした。

「そーだね」

そのわずか下で同じように座るツクが気の抜けた声でそう返す。ナギの上の踊り場にはサノが壁に寄り掛かっているが、ただ上の階を見上げるだけで…何かを口にする気配すらない。

「そろそろ、撤収した方がよくない？これ以上は人目につくよ」
ツクがため息交じりに提案する。立てかけていた刀を手に取り、立ち上がる。

「だが、まだイザが降りてきていない」

「わかっている。さすがに今はイザが一人でいたってのも、さ」
「…サノ、お前はと思う？」

ナギの問いかけに、サノが顔をわずかにあげる。フェルト帽で半分ほど隠されたその顔はいつになく青白く、彼の疲弊の濃さを露わにしている。

「…イザのしたいようにしておけばいい」
ぼつりと言うと、後はもう用はないとばかりに二人から顔をそらした。

ナギとツクは顔を見合わせると処置なし、と互いに肩をすくめた。

「まあ、サノの言うとおりだけどさ。いつもの事だしな」

「そうだな。自分と同じ年頃の少女を処理すると、いつもああなる」
「まだ吹っ切れてないんだろ。まあ、そこがイザらしいという
か」

苦笑するツクにナギが頷く。吸い殻を携帯灰皿の中に落とす。

二人の会話を聞くとともになしに聞いていたサノがふいに鼻を鳴らした。

何故か小ばかにするようなそれに二人が何か問いたげに見上げる。

「：気付かないのか、イザがああして同じ年頃の処理した少女の側で悼むのは：皆、名前に『アキ』がつく者だけだ」

「『アキ』：？」

「確かにそうかもしれないが、何故だ？サノ、お前は何を知っている？」

訝るようなナギとツクにサノは珍しく笑った。ただ：それは見る人を不快にさせるようなそんな嗤いであるが。

「イザがまだ人だった頃の名は、『あき』さんだったそう」

サノは意味ありげに言葉を切った。階段に座る二人を見下ろし、声を決して階上のイザに届かないように低める。

「そして：イザがその手で

「デキソコナイ」にしてしまった方も、ね」

夜と新しい一日を思わせる夜明け 朝の狭間で、死神達は各々の
思いを胸に抱く。悲哀にも似た、痛みを……

エピローグ：まどろみに

ふ、と意識が浮かび上がった。ただ、それは覚醒に至ることはなく、内での目覚めだった。

それは例えるならば…夢と現を行き来するような、微睡眠。

自分の意識の中で目覚めたイザは、それを理解するや否や眉をしかめた。

「どういつつもりなのかしら、『書き手』殿？」

言い方こそ柔らかいがその声は低く、詰問するかのようである。

その声に応じるように、暗い闇の中から溶け出すようにソレが現れた。辺りは全てを飲み込むような闇だというのに、その姿は浮き彫りにされたかのようにやけにはつきりと見える。

「さあ？どうだと思う？」

ソレは少年だった。年の頃は12、3歳だろうか、腰までの黒と銀とが交じりあった不可思議な色合いの髪をはためかせている。

唇こそ笑みの形になっているが、紫紺の瞳は笑わずに値踏みするようにイザを見ている。

「仕事が終わって休みに入ったというのに、どうして起こしたの？」

少年は問いかけてくるイザにクスクスと笑った。

「ナギにもツクにもサノにも聞かれたくはないだろう、アノ事はねえ、『アキ』ちゃん？」

からかうような口調の少年をイザは睨み付けた。ギリ、と皮膚に爪が食い込む程強く拳を握る。

「ああそういえば、今回も

「デキソコナイ」が現れたんだって？お望みの彼女だったのかい？」

「フン：白々しいわねえ、『語り手』。全部、識っているくせに」

「それはずいぶん言い方だなあ。僕はいつだって君の願いが果たされるよう、祈っているのに」

舞台上のように大袈裟な仕草で胸に手を当てる少年に、イザは鼻

を鳴らした。

「馬鹿馬鹿しい。このくだらないゲームを作り出した張本人のくせに」

「…ああ、そういえば君は識っているんだったね。テラと前のサノが仕組みを知って、君にも伝えたんだった。…でも、くだらないとはひどいな」

少年は悲しげに目を伏せたが、それでも唇は固まったかのように笑みのままである。

「知ってるわ私達死神も、

「デキソコナイ」も貴方の暇潰しの産物だつてね。所詮は、貴方の創ったゲームの駒でしかないつてね。そして、だからこそ私とあの娘が出会えるかどうか握っているつてことも、ね」

「確かにそうだけど、それでも存在意義があるだけマシじゃあないかい？」

「……」

イザは応えず、ただ少年を睨みつけた。これ以上ないほどの敵意をこめて。

少年は肩を竦めると何もなただ闇がわだかまった空間を蹴つて、器用に重力に逆らつて半回転した。ただ、頭はイザのと同じ高さに維持されているが。

「君は、真実を識っている。ならば何故、かつてテルと前のサノが君にソレを伝えたように、彼等に教えてあげないんだい？彼等にも知る権利はあると思うけど？」

少年はまたもやクスクスと笑いながら問いかける。逆さまになつたままであるというに役者が如く両手を広げて。

「今でさえ、この選択を後悔しているのよ？自分達が貴方の暇潰しの為の駒だと知ったら…もっと、そう、壊れてしまふほど後悔するに決まっているわ。そして、私のように……っ」

服の胸元を強く握りしめ、吐き出すようにイザは言った。

だが、数秒経ってから上げられた顔には決意だけがあった。そし

て、少年を真つ向から見据える…どこまでも彼女　『アキ』らしく。

「だから、私はまだ彼等には話さない。いつか、彼等にそれだけの事を受け止められそうになるまで…私、に覚悟ができるまで…」

叫びにも似た宣言に、少年は楽しげに目を細めた。まるで、新しい玩具を手に入れた無邪気な幼子のように。

「君は、君達は、人である事を棄て、仮にも神と名がつくモノと成った。なのに、君達はいつまでも人であり続けるのだね」

「当たり前でしょ、姿が変わらなくとも、存在意義が変わるうとも、私達が人であったことに変わりはないのだから」

イザは『書き手』を、全ての始まりを見据えたまま、不敵に笑った。

少年は満足そうにこれまた微笑むと、元の体勢に戻った。

音もなく少年の体が薄れ、溶けていくように少しずつ消えていく。

「次に会う時、君がまだ人である事を、そして願いが叶い君があの娘を今度こそちゃんと殺せている事を祈るう…あき、ちゃん」

『

その言葉を最後に、『書き手』はイザの前から姿を消した。

イザは、今はもう闇が残るだけの彼がいた位置をしばらくの間、睨み付けていた。

だが、ため息を一つつくところから目を逸らして目を閉じた。

かつては恐れ、近寄ろうとするのを極力避けていた闇だが、今はただ心地よかった。これが他でもないイザ自身であり、その身を守るものだからだろう。

その守りに包まれ、心安らかに死神は深い深い眠りに落ちていった。今度は誰にも邪魔される事なく、眠りと悪夢だけの中へと意識が溶けていく。

死の境に棲まうモノ

これはそんな、『人』である事を棄てた、けれども誰よりも『人』らしい少女の物語。そして、彼女はまた歩き続ける、願いが叶う時まで……彼女が死ぬその時まで……

エピソード：まどろみに（後書き）

とうとう終わりました。長かったあ…。

途中で文体が変わったり、受験挟んだりで…大変だったけど、ようやくと終わりです。一年以上かかりましたっ！

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございましたっ！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7420a/>

死の境に棲まうモノ

2009年7月3日19時01分発行